

だから姉にはかなわない (前編)

「……よし、準備完了」

俺は小声でつぶやいた。

黒い上着に黒いズボン。顔も靴墨で黒く塗って、二階のベランダで息を潜めている。

端から見たらかなり怪しい恰好だが、今夜は月も出ていないし、影の中でじっとしていれば気付く者はいまい。

こんな怪しい恰好で、いったい何をしているのかって？

俺の手の中にはカメラがあつて、今隠れているのが姉貴の部屋の窓の外……といえば想像つくんじゃないかな。

\* \* \*

「うーん……」

夕食の後、俺は居間のソファで貯金通帳とにらめっこしながら唸っていた。

「なに唸ってんのよ。脂汗まで流して、ガマの油

じゃあるまいし」

後ろを通りかかった姉貴が、からかうように俺の頭を小突く。ついでに肩越しに通帳を覗き込んで「ふっ」と鼻で笑った。

失礼な態度だが、笑われた理由はわかっていて、から何も言い返せない。そのために先刻から唸っているんだから。

そう、残高があまりにも情けない額なんだ。

この春めでたく高校生になった俺は、さつそく念願のバイクの免許を取った。これで夏休みは楽しいツーリング……といけばよかったのだが、世の中そう甘くはない。

免許があつたって、肝心のバイクがなければどうしようもないんだ。中学時代に貯めた貯金は、免許を取るために大半を使ってしまった。このままでは夏休みまでに頭金分を貯めるのも難しい。

放任主義のうちの親は、こういうことに金を出してはくれない。「自分で稼いだ金で、自分の責任で乗るんだったら、バイクでも何でも好きにすればいい」って。

「美人で優しいお姉さまが貸してあげよっか？」

「冗談じゃない」

姉貴の台詞が善意から出たものではないとわかつているから、俺は即座に断った。十六年も一緒に暮らしていれば、考えていることなど手に取るようにわかる。

「姉貴に借りるくらいなら、武富 にも行った方がマシだよ」

「よくわかってンじゃん、あたしの性格」  
「当たり前」

姉貴に借りを作ったりしたら、悪徳金融よりも数倍恐い。

「じゃ、せいぜい頑張ってバイトでも探さない」  
そう言つて、バスタオルを肩に掛けて風呂場へ向かう。しかし、姉貴の後ろ姿を見ているうちに、俺の頭にふと、素晴らしいアイデアが浮かんだ。

悪魔が、耳元でささやいたんだ。

『立ってるものは親でも使え。勃てるものは姉でも使え』ってね。

\* \* \*

姉貴は俺より一つ歳上、高校二年生だ。

弟の口から言うのもなんだが、外見はけっこう可愛いと思う。

年上に向かって「可愛い」ってのもどうかと思うけど、身長百五十五センチと、俺より二十センチ近くも小柄なせいかわ「美人」というよりも「可愛い」って印象が強い。

それも清楚な可愛らしさじゃなくて、どちらかというと小悪魔的つてやつだ。性格をよく知ってるから、余計そう思うのかも知れない。

スタイルも悪くない。ウエストなんて力いっぱい抱いたら折れそうなくらい細くて。なのに胸はかなり大きいんだから反則だ。

夏が近づいて最近は薄着になることが多い。胸や腰が描く挑発的な曲線に、弟の俺でもドキツとしてしまう。

だから、姉貴は俺の友達にも人気がある。たいして親しくない奴まで、なにかと口実を作っては家に遊びに来ようとするほどだ。

ここまで説明すれば、もうわかっただろう？  
姉貴のアブない写真を撮ってファンに売れば、

頭金の足しくらいにはなるってわけだ。

本当は風呂場を隠し撮りできればいいんだろっけど、準備も必要だし、そもそも裸になることが前提の浴室というのは、覗きにくくてきているものだ。

やっぱり、最も無防備になるであろう姉貴の部屋で待ち伏せするのが一番いい。姉貴は風呂から上がったら、バスタオル一枚で部屋に戻って着替えるから、ここでも全裸になる瞬間はあるはず。

シャッターチャンス逃さない自信はある。俺はカメラが趣味だから。

俺が盗撮ポジションについてしばらくすると、姉貴がミネラルウォーターのペットボトルを手にして部屋に戻ってきた。

予想通りバスタオル一枚。太股も露わになって、毛が見えるギリギリ、の刺激的な恰好だ。俺はすかさずカーテンの隙間からシャッターを切った。

シャッター音で気付かれないように、カメラ本体にはタオルを巻き付けてある。これで動作音は

かなり小さくなるし、姉貴は部屋にいる時いつも音楽を聴いているから、まず気付かれる心配はない。

ミニコンポのスイッチを入れた姉貴は、ぼんつと勢いよくベッドに座った。はずみでバスタオルが滑り落ちるが、向こうは俺の存在を知る由もないから、そのまま平然とミネラルウォーターを喉に流し込んでいる。

ゴクツ……。

俺は唾を飲み込んで、ファインダーを覗いた。姉貴の胸がモロに視界に入る。

水着とか下着姿とか、ノーブラに薄いＴシャツ一枚とかいうのは見慣れている。しかしナマ乳を見る機会なんて、いくら姉弟だってそうそうあるものではない。まともに見るのは、多分、まだ一緒に風呂に入ったりしていた小学生の頃以来ではないだろうか。

いつの間にこんなに成長したんだろっ。

着やせするのか、思っていた以上に大きい。パンパンに膨らんだ風船のような張りがあって、形もグツドだ。

風呂上がりで上気した肌は、ほんのり桜色に染まっている。

姉貴は音楽に合わせて身体を小さく振っている。当然、胸ではその動きが増幅されてユサユサと大きく揺れていた。

刺激的な光景だ。

俺は全身、上半身、そして胸のアップと何枚もの写真を撮った。こんなの姉貴のファンに見せてやったら鼻血モノだ。こっちの言い値で買うに決まっている。

ペットボトルが空になったので、姉貴は立ち上がってそれを机に置いた。おかげでヘアまで写すことができた。

ベッドに戻って、今度はごろりと横になる。すぐに寝返りをうって俯せになり、三十秒くらいしてまた仰向けに戻った。

そのまま目を閉じて、しばらくじっと動かなくなる。まさか眠ってしまったのでは……と思いはじめた時、姉貴の手が動いた。

右手がゆっくりと、乳房の上へと移動する。やや遅れて今度は左手がもう片方の乳房に。

(……え?)

あるう事か、姉貴は胸を揉み始めた。掌には収まりきれない大きな乳房が、手の中でひしゃげる。ゆっくりと、こね回すように、姉貴は自分の胸を愛撫している。

「は……あ……」

姉貴の口から小さな声が漏れた。

これは、まさか……。

(お……、おなに……?)

俺は驚いて、しばらく写真を撮るのも忘れていた。その間にも手の動きは少しずつ速く、そして大きくなっていく。

「ん……ふう、あ、ん……うん……」

姉貴は切なげな吐息を漏らしながら、その行為に没頭している。揉むだけじゃなくて、乳首を指でつまんで捻るようにしたり、引っ張ったり。

「あふっ……うん……あ……」

胸だけじゃない。いつの間にか、内股を擦り合わせるように動かしている。

「はあっ……あん！ん、ああん！」

やがて俺は我に返って、夢中でシャッターを切

り始めた。

こんなチャンス、二度とない。

こんな……。姉貴が、オナニーなんかしてるなんて……。

いや、ショックを受けるのは間違っているよな。

姉貴はルックスがいいし性格も明るいから、かなりモテる。付き合っていた男だって過去何人もいる。

だから、もうとっくにセックスも経験済みだろう。経験済みの女子高生なら、そのほとんどがオナニーの経験だってあるはずだ。

そう頭ではわかっているが、やっぱりショックだった。今夜が初めてのはずはない。まさか姉貴が隣の部屋で、こんなことをしていたなんて。

実の姉だからだろうか。この間友達に借りて観たオナニーもののアダルトビデオよりもずっといやらしく感じた。やっていることは、ビデオの方がずっと過激なはずなのに。

( っ！ )

いつの間にか、俺は勃起していた。当然だろう。

十六歳になったばかりの健康で童貞の高校生に

は、刺激が強すぎる光景だった。

ズボンの前の部分に手を当ててみると、カチンカチンに固くなっている。

俺は右手一本でシャッターを押し続けながら、無我夢中でズボンのファスナーを下ろして左手を突っ込んだ。

「っ！ ん……くう……」

興奮しすぎていて、ちよつと触っただけで射精してしまいそうだった。カメラを持つ手がブレないように気を付けて、ゆっくりと左手を動かす。

ビデオを観ながらするよりも、何倍も何倍も興奮した。

なにしろ並のAVギャルよりもずっと可愛い姉貴が主演で、しかもこれはライブなんだから。

俺は荒い息をしながらシャッターを押しした。

どんなに気を付けても、何枚かはブレる写真ができているだろう。けど仕方がない。こんな光景を黙って見ていられるほど、俺はスレちゃいない。

「ああん！ あん！ ああっ！ あっっ！」

姉貴は左手で相変わらず胸を揉みながら、右手

を下半身に持っていった。

「はあっ！ は……………ああ！ ん……………くう……………ん、んっ！」

アノ部分を、前後に擦っている。

胸だけを触っていたときよりもずっと気持ちよさそうに。

全身を反らせて、いやらしい声を上げている。

「ふう……………ん……………あ……………」

脚を大きく開いた。その中心部までばっちり見える。

あまり濃くないヘアの下に、唇のように赤い部分があった。濡れて、天井の蛍光灯を反射している。

（姉貴の……………おま こ……………）

俺の目はその一点に釘付けになった。それは、小さい頃に遊びで見せあつこしたものと全然違う器官に見えた。

脚を大きく開いた姉貴は、人差し指、中指、薬指の三本をその部分に当てて、円を描くように動かしている。手の動きに合わせて、腰を艶めかしくくねらせた。

「んっ……………んっ！」

俺の左手も、ズボンの中で動きを速めていく。抑えられるわけがない。

「あゝっ！ ああっ！ あはあ……………あっ！ ……

ん……………く……………ん……………んあああっ！」

姉貴の中指が、中へと入っていった。姉貴は一度ギュツと脚を閉じて、くぐもつた声を漏らす。

それからまたゆつくりと脚を開く。中指は根元まで姉貴の中に埋まつていた。

「んっ……………ん……………ふ……………うん……………はああゝ」

指を第一関節まで引き抜いて、また奥まで入れて。

その動きを繰り返す。引き抜かれた指は透明な液体で濡れていた。指を出し入れするたびに、その液体はあふれ出て割れ目の周囲に広がっている。き、シートにまで染みを作っている。

「あは……………あ、イイ……………イイいゝ！ あ……………もつとお！」

ついには人差し指も中に入れてしまった。交互に出し入れするように動かす。

二本の指で大きく広げられた穴から、手押しポ

ンプのように愛液が溢れ出している。それは先刻までよりもやや白く濁っているように見えた。

「あああゝっ！ ああゝっ！ イイのお！

もう……もう……我慢できないっ！」

指を入れたまま、姉貴は身体の向きを変えて俯せになった。

枕に顔を埋めて、お尻だけを少し突き上げるような恰好で、腰を激しく上下に振って指を動かしている。

「いいいゝっ！ ああゝっ！ あああゝっ！」

中に入っている指が二本なのか三本なのか、それとも四本なのか。動きが速くてわからない。

「あああああっ！ あああっ！ イイツ！ イイ

よおっ！ そこっ！ そこおっ！ もっ

とおおっっ！」

一段と声が大きくなり、動きが激しさを増す。

イキそうなんだろうか。きつとそうだ。

だけど、無情にもここでフィルムが終わってしまっ。

無情？ いや違う。幸いに、だ。

俺はフィルムを交換しようなどとは考えずに、

カメラを放り出すように置いた。

先刻からずっと、左手の中ではち切れんばかりに膨張していたペニスをズボンから引っぱり出すと、両手で握って力いっぱいしごく。

「う……っ、あっ、ああっ！」

もう、本当に限界ギリギリだったんだ。ベッドの上の妖艶な光景を目に焼き付けながら、俺はあつという間に達してしまった。

ビュッ！ ビュッ！

弾けるような勢いで噴き出した精液が、窓ガラスにべったりとこびりつく。

ビクン！ ビクンッ！

俺のペニスは脈打ちながら、白濁した粘液を吐き出し続ける。

一度にこんなに出したのは初めてだ。

脱力感が全身を襲う。脚から力が抜けていくのを必死に堪えて、ベッドの上から目を逸らさないようにする。

姉貴も今まさに、クライマックスを迎えようとしていた。

ベッドがトランポリンであるかのように、身体

が弾む。

「そこおっ！　そお……もつとおおっ！　ああっ  
あああ〜っ！　いいいいい〜っ！　イクツ、イ  
クうつ、イツちゃ……やつ  
あああああ〜っつっ！」

最後は絶叫だった。全身をびくびくと痙攣させ  
て、姉貴が叫ぶ。

「あああああつ、いああああつ！　ああつ、  
ああああ……ああつ！　あ……はああつ」

肺の中の空気を全部吐き出したところで、悲鳴  
は止んだ。

激しかった動きが止まる。

「っあ……は……あ、はああああ〜っ、  
はああ……」

姉貴の身体から、力が抜けていく。虚ろな瞳で、  
何度も何度も大きく深呼吸を繰り返していた。

俺は射精後の脱力感もあって、ただ茫然とその  
光景を見つめていた。

やっていることはアダルトビデオの方がずっと  
過激？　とんでもない！　姉貴の乱れっぷりった  
ら、これまで見たどんなハードなビデオよりも激

しかった。

なにより、これは演技じゃないんだから。

姉貴が……あの姉貴が……。

あんなに激しく……。

いやらしい声を上げて……。

あんなに腰を振って……。

終わってみると、まるで夢だったように感じる。

こんなことが現実にあるわけがない、って。

だけど、窓ガラスの表面を白く汚している液体

は、現実以外の何物でもなかった。

姉貴はしばらくベッドの上で俯せになってじつ  
としていた。やがてゆっくりと起きあがると、ベッ  
ドの脇に置いていたティッシュを取って、手とあ  
そこを丹念に拭いた。

心なしか、恥ずかしそうな表情をしている。

きつと、コトが終わって我に返って、急に恥ず  
かしくなったんだらう。俺もオナニーした後はそ  
うだ。

姉貴はバスタオルを拾うと、心許ない足どりで



部屋を出ていった。ややあつて風呂場の扉が閉まる音が聞こえてくる。

多分、汗をかいたんでまたシャワーでも浴びるんだろ。

これはチャンスだ。今のうちに引き上げなければ。

俺はカメラを持ち上げ、窓を開けて部屋に入った。ふと気がついて、ティッシュを何枚か取ると俺が汚した窓を綺麗に拭きあげる。

証拠隠滅の後でなんとなく、乱れたベッドに顔を押しつけて匂いを嗅いでみた。

それはなんだか『女』の匂いって感じがした。

\* \* \*

それから数日後。

俺は、数枚の新札を手にほくほくしていた。

あの時の写真の見事な出来映えつたら。思わず現像中に二発も抜いてしまったくらいだ。

過激すぎて、さすがに友達に売るわけにはいかなかったが、そこはそれ、蛇の道は蛇。ああいつ

た写真を金にするルートはいくらでもある。ただしここで詳しく説明することはできないが。

写真に写った姉貴は本当に綺麗で、そしてエッチだった。いやもう、持つべきものは可愛くてエッチな姉貴だね。

……と、ひとり悦に入っていると、いきなり背後から伸びてきた腕が、俺の手から金を奪い取った。慌てて振り向くと、姉貴が慣れた手つきでお札を数えている。

「な、何すんだよ！」

金を数えていた姉貴はそれをふたつに分け、少ない方を俺に返した。

「モデル料は六割で勘弁してあげるわ」

「つつつつ！」

一瞬で顔面が蒼白になる。

姉貴は怒っているのか面白がっているのか、よくわからない表情をしていた。

全身から冷や汗が噴き出す。

「な、な、な……なんのことだよ」

とぼけようとしても、悲しいかな声が裏返っている。こんな不意打ちを食らって、平然としてい

られるわけではない。

「気付かないと思った？ あんたの考える事なんてお見通しよ。特別にサービスしてあげたんだから、これは当然の報酬でしょ？」

手にしたお札で、ひらひらと俺の顔を扇ぐ。俺は何も言い返せない。

「それにしても、見られてると思うと興奮したわ。もう、普段よりすごい感じちゃった」

姉貴がけらけらと笑う。どうやら、怒ってはいないようだ。

「でも、写真だけでもずいぶんお金になるのね。ねえ、今度は隠し撮りじゃなく、ちゃんとしたモデル撮影で、もっと過激な写真撮ろうか？ その代わりモデル料は七割、ね」

お得意の、小悪魔の笑みを浮かべて姉貴は言った。

中編に続く

だから姉にはかなわない（中編）

「慎くん、そろそろ始めよっか？」

ベッドの上に座った姉貴が言う。

自分の部屋にいて、しかも夜だというのに学校の制服を着て。

ただしそれは、姉貴が通う私立白岩学園のシンブルなブレザーではない。フリル付きのブラウスと大きなリボンが可愛いと評判の、私立聖陵学園の夏服だ。

おそらく、この辺りでは人気ナンバーワンの制服だろう。聖陵へ進学した中学時代の友達から、今日のためにわざわざ借りてきたんだそうだ。

まったく、姉貴ってば……でもちよっと嬉しいかも。

あれから十日ほどが過ぎた土曜日の夜。

いよいよ『撮影会』をすることになった。

今夜、家には俺と姉貴しかいない。親父は単身赴任だし、この週末は母さんも親父のところへ

行っている。単身赴任といっても特急で二時間くらいの街だから、母さんはちよくちよく行き来しているんだ。まさか、家で子供たちがこんなことをしているとは夢にも思っまい。

隠し撮りだった前回と違い、今回はかなり本格的な撮影だった。

カメラも三台用意した。

一台は俺が手に持って、あとの二台はベッドの横に置いた三脚にセット。うち一台はリモコンで操作して、もう一台はインターバルタイマーで自動撮影させる。

これでシャッターチャンス逃さずに、いろんな角度から撮影できるって寸法だ。撮影用のライントも借りてきたし、もう完璧。

姉貴の方も準備万端のようだ。

今日はずいぶん長く風呂に入っていたし、髪も丁寧にセットして、お化粧もしている。少しでも綺麗に撮らいたいっていう女心だろうか。そうまでしなくても、姉貴は十分綺麗だと思うんだけど。

「いいよ、始めよう」

俺はカメラを構えた。

最初は制服を着たまま、ベッドの上で色々ポーズを取ってもらおう。もちろん、ミニスカートの中が覗けるような姿勢が多い。

制服の影響もあるんだろうけど、今日の姉貴は清純さと色気のブレンドが絶妙で、普段より二割り増しくらい魅力的な気がする。性格は写真に写らないからね。

ブラウスのボタンをいくつか外して、胸の谷間を強調してもらおう。今日はブラもずいぶんと高級そうな物だ。

続いて、スカートをまくり上げてショーツを露わにさせる。姉貴つてば、かなりきわどいTバックなんて着けていて、白いお尻が目眩しい。

清純な制服と過激な下着のミスマッチがたまらない。

ベッドに俯せになった姉貴が、誘惑するような表情でこちらを見上げる。

微かに潤んだ挑発的な瞳。

濡れた唇。

「どお？ 艶っぽい？」

「ああ、もう最高！」

俺はファインダーを覗いたまま答えた。

これを見たら、どんな男だってイチコロだ。

「じゃ……そろそろ……」

姉貴は仰向けに体勢を変えると、胸に手を当てた。ブラウスの上から、大きな胸をゆっくりと揉む。

「あ……はあ……んっ……」

すぐに、鼻にかかった切ない声を漏らし始める。この前の時「見られて感じる」って言ってたけど、やっぱり今日もそうなんだろうか。

「んふ……ん……ん……はあ」

大きな胸が、姉貴の手の中で軟体動物のように形を変える。

小さく開いた唇から、微かに見える舌が艶めかしい。

「……姉貴つて、いつもこんなコトしてんの？」  
シャッターを押しながら聞いてみる。

なんだか、ずいぶんと手慣れているような様子だから。

「まあ、ね」

姉貴がぺろりと舌を出した。

「でも、慎くんだってオナニーくらいするでしょう？」

「ん……そりゃ……まあ」

「だったらいいじゃない。お姉ちゃん、気持ちいいこと大好きだもん」

そう言っつて姉貴は再び自慰行為に意識を集中する。

スカートを下ろして、俺に見えやすいように身体の向きを変えると、脚を大きく開いた。

ショーツの上から中指を当てて、割れ目に沿って滑らせる。

「は……ああ……ああっ！」

びくつと身体を震わせる。意図せずに敏感な部分に触れたって感じた。

「んふ……んふ……う……んあっ、ん！」

前後に滑らせていた指を、こんどは円を描くように動かす。

クリトリスの上あたりで小さな円を、割れ目全体を擦るように大きな円を描くように。

「はああっ！ ああっ……ああっ……んんっ！ あっっ！」

指の動きに合わせて、腰も円運動を始めていた。声のトーンが一段上がる。

「……気持ちいいんだ？」

「うん……イイ……すっごく、感じちゃう。ね、ほらあ……」

姉貴は手をどけて、その部分を俺の前に晒した。手が当たっていた部分が、楕円形に色が変わっている。

濡れて、染みになっているんだ。

これも刺激的な眺めだった。この前は最初から全裸だったから、こんなシーンは初めてだ。

「……胸も、見せて」

「ん……」

俺のリクエストに応えて、姉貴はブラウスのボタンをひとつずつ外した。ブラのフロントホックも外して、大きめの、形のいい乳房を露わにする。

真っ白い、柔らかそうな二つの膨らみの頂上に、ピンク色の突起が乗っている。

姉貴は右手をまたショーツの上に戻すと、左手

を胸にやって乳首をつまんだ。

「んっ！ つく……ん」

親指と人差し指で小さな突起をつまんで、きゅつきゅと引っ張る。

「イ、イイ……感じちゃう……」

右手と左手と、どちらからの刺激によるものだろう。ショーツの染みが先刻よりも大きくなっている。

濡れたショーツがぴったりと肌について、唇のように赤い部分が透けて見えた。

「すごい、濡れてる……。透けて見えてるよ、姉貴」

もちろん、その部分はアップで撮った。

「……だって……気持ちイイんだもん……」

目が、泣いているみたいに潤んでいる。

「スゴイ……スゴイ……感じちゃうのぉ……ほら……」

ショーツの脇から指を入れて動かしている。

透けた薄い布地の下から、クチャクチャと濡れた音が聞こえている。

「すぐ、いやらしい音だ。」

もう、指を中に入れてしまっているようだ。

「ね、……見て……」

姉貴がショーツを脱いだ。小さな布に隠されていた秘所が、全て曝け出される。

そこはぐっしりと濡れて、陰毛がべったりと張り付いていた。

「いっぱい濡れてるでしょ？　すぐ感じるの、ああ……」

両手で、割れ目を開いてみせる。広げられた穴の中から、透明な液体が滴っていた。

「あうん……」

姉貴の中指が、するりと中にもぐり込む。指は簡単に付け根まで埋まった。

「はあ……ああ……あ……ん。お……奥まで入っちゃったぁ……」

続いて人差し指が、そして薬指までが姉貴の中に飲み込まれていった。

「ああん！　ああ、スゴイ！　入ってるぅ……奥まで……ああっ、あああっ！」

三本の指の間からじゅぶじゅぶと湿った音が漏れ、愛液が泡立っている。

「すごい……三本も入ってる……大丈夫なの？」

「うん……。でも、もうこれでいっぱい……。イ

イ……はあっ、あ……」

溢れ出した愛液はお尻の方まで流れ、シートにも染みを作っている。

「ねえ……そこにある、青いビン取って……」

姉貴が、棚の上を指差して言った。そこには、姉貴の化粧品やなんかが置かれている。

俺は言われた通り、何本か並んだビンの中から、水色のビンを取って姉貴に渡した。化粧水の容器らしいが中身は空っぽ。栄養ドリンクよりもやや小ぶりの、小さなビンだ。

「何するの？」

「ふふ……わかんない？」

姉貴は小さく笑って、ビンをあそこに擦り付けた。ピンはたちまち愛液にまみれてヌルヌルになる。

「これは……まさか……」

「ああっ！ ああっ！ んんっ！」

左手の人差し指と中指で割れ目を広げて、ビンの尻を当てた。

膣口が押し広げられて……。

「はあっ、んん……っ！」

ピンはヌルリと姉貴の中へ滑り込んだ。

「えへへ……ほらあ、入っちゃった……」

指で開いてそれを俺に見せる。

刺激的な光景だった。

姉貴のおまんこから、ビンの蓋の部分だけが顔を出している。

あんな物が入るなんて、女体の神秘とでも表現したらいいだろうか。

痛くないんだろうか。でも姉貴は、これ以上はないってくらい気持ちよさそうに、恍惚とした表情を浮かべている。

「ああっ！ ああっ！ あんっ！ はああっ！ んんっ！」

姉貴の右手がピンを動かす。

リズムカルな動きに合わせて、半開きの唇から甘ったるい声が漏れる。

奥まで埋められたピンに押し出されるように、愛液が溢れ出している。

先刻まで透明だったはずのそれは、今は白く

濁っているのがはっきりとわかった。

「姉貴つてば……いつもこんなことしてんの」

「……ゆっ、指だけで物足りないときは……ね。

あああん！ 奥まで届いてるうっ！」

ズブズブと奥まで押し込んで、また引き抜いて。

何度も何度も繰り返す。

全身が汗で濡れて光っている。

「はああんっ！ イイイっ！ ああん、あん！

あんっ！」

水色の綺麗なビンがピストン運動を繰り返して、

姉貴を狂わせていく。

さて……。

俺は前回以上に激しい姉貴の痴態を、驚き、見

とれながらも調子よくフィルムに収めていた……

筈なのだが、ここで大きな問題にぶつかった。

動きにくいんだ。

前回は盗撮で、一カ所にじっと立っていたから

それほど問題にならなかった。だけど今回は、姉

貴の姿勢に合わせてこまめにベッドの周りを移動

し、ベストポジションで撮影しなければならぬ。

なのに、この動きにくさったら。

つまり……。

この前と同様、また俺のモノは勃起しているん

だ。

あの時以上に興奮してしまっている。

もう、ビンビンのギンギンだ。

ジーンズの前が痛いほどに突っ張って、前屈み

にならざる得なくて……動きにくいっいたらありや

しない。スウェットやジャージのような柔らかい

ズボンを穿くべきだったって思っても後の祭り。

俺がなんとか動きやすい体勢を見つけようと、

もそもそ試行錯誤していると、姉貴に股間の膨ら

みを気付かれてしまった。

「……何やってんのよ？」

ビンを動かす手を止めて、俺をジト目で見る。

「実の姉に欲情するなんて、慎くんって変態？」

「い、いや。これが普通だと思っただけ……」

健康な男子高校生と、その目の前で激しいオナ

ニーを繰り返す可愛い女子高生。

血がつかつているから……なんて理由だけ

で、男の生理現象を抑えられるはずもない。

襲いかからずにいるだけでも、俺の自制心は聖



職者並みだと思う。というか、まあ、弟にとって姉ってのは無条件に怖い存在で、とてもそんな気を起こすことはできないってのが事実なんだけど……、そう考えるのは俺だけだろうか？

「……そんなんじゃ、動きにくいつしょ？」

「だから困ってるんだよ！」

姉貴は呆れたように肩をすくめる。

「……まったく。ちよつとこつち来なさい」

姉貴の前に立つと、いきなりジーンズのファスナーを下ろされた。

驚くより先に姉貴の手が潜り込んで、いきり

立った俺のモノを引っぱり出す。

それはもうギンギンに固くなって、先端から透明な汁を滴らせていた。

「へえ、慎くんのとってけっこう大きいね」

「あ、姉貴……？」

姉貴の手がそれをきゅっと軽く握る。

ビクンビクンと脈打っているのがわかる。

姉貴ってば、何する気？ まさか……そんな……。

その、まさかだった。

「お姉ちゃんが又いてあげる。それで楽になるでしょ」

握った手を上下に動かす。

「ちよつと！ 姉貴……ああっ！」

姉貴を止めようとする間もなく、俺の快感ゲージはレッドゾーンに突入してしまう。

「ふふ……ん、気持ちいい？」

「……いい、気持ちいい……」

女の子に触られるなんて、初めてのこと。いや、まだ小学校低学年の頃に、遊びで姉貴と見せっことした時以来だけど、それは数に入れなくてもいいだろう。

とにかく『性』というものを意識するようになってからは初めての体験なのだ。しかも、姉貴の痴態をさんざん見せられて、もう限界寸前まで高ぶっている。そこを女の子の柔らかかな手で触られて、気持ちよくないわけがない。

「こんなに固くしちゃって。実の姉に握られて感じるなんて、慎くんってやらしいんだ」

「じ、実の弟のを握るのはやらしくないのか？」

「じゃあ、止める？」

「……………やだ」

姉貴つてば、やっぱり意地悪だ。

「お姉ちゃんがエッチなのは知ってるっしょ。もっと気持ちよくしてあげる」

手を動かしながら、姉貴はその先端に顔を寄せた。柔らかな唇が押しつけられる。

「ふ……………くっ」

「ふふ……………、敏感だね」

続けて二度、三度と亀頭にキスをする。

次の瞬間、俺のペニスは姉貴の唇の中にするりと飲み込まれていた。

「ああっ！」

生まれて初めての刺激に、思わず女の子みたいな声を上げてしまう。

「あ……………ああ……………」

舌が、亀頭に絡みついてくる。

唾液で濡れた口の粘膜が、俺のペニスを擦り立てる。

ちゅぷ、ちゅぱ……………。

音を立てて、奥までくわえ込んでいる。

舌がなにか別な生き物のように絡みついてく

る。

俺の頭は、真っ白になっていた。

なにも考えられない。

姉貴にフェラチオされている。

姉貴の口を犯している。

ただそれだけを意識していた。

「気持ちいいっしょ？ こんなコトもできるんだよ」

一度ペニスを吐き出すと、姉貴は目を細めて

笑った。

そして、自分の胸を手で持ち上げるようにして、唾液に濡れた俺のペニスを挟み込む。

柔らかな乳房で包み込んで、交互に擦るように動かした。

「あ……………は……………あっ」

「いいでしょ？ 弟にパイズリしてくれるお姉さ

まなんて、普通じゃないよ」

「……………いい……………いいよ！」

「慎くん、手が止まつてる。せっかくエッチなこととしてあげてるんだから、ちゃんと撮りなよ」

「え？ あ、ああ……………」

すっかり忘れていた。俺は慌ててカメラを構え、三脚にセットした方のカメラのリモコンシャッターも押す。

姉貴は胸で挟んだまま、ペニスの先をペロペロと舐めた。

そのまま亀頭を半分くらい口に含んで、上目遣いにこつちを見上げる。

これ以上はないってくらい、艶めかしい表情だ。俺は気の遠くなるような快感に抗いながら、その表情を撮影した。

「あ……あ……！」

姉貴は胸を放すと、また直に手で握ってきた。

根元を手でしごきながら、先半分を口に含んで舌を滑らせる。

顔が前後に動いてペニスを激しく擦る。

くわえたまま、顔を左右に振る。

手の動きも速くなって……。

「あ……あ、姉貴いつつ！」

ドクン！ ドクン！

大きく脈打った俺のペニスが、熱い精を吐き出した。

イってしまった。

生まれて初めて、自分の手以外のものにイカされてしまった。

姉貴の口の中に、射精してしまった。

「あ……あ……！」

噴き出した大量の精液は、姉貴の口には収まりきれずに、顔と胸をべっとり汚している。

何度も何度も出してしまった。この前、姉貴のオナニーを見ながら射精したときよりもさらに多い。

姉貴に向かって顔射してしまうなんて怒られるかと思っただけ、姉貴は嫌がる様子もなく、少し驚いたように俺を見上げていた。白濁液が口から溢れ出し、頬や顎、そして胸の上を流れている。

夢中でシャッターを押した。

俺の精液が姉貴を汚している……その事実、ひどく興奮していた。

しばらく黙って俺を見つめていた姉貴は、小さくクスッと笑った。

顔にかかった精液を、指で拭って口に運ぶ。

「あ……姉貴……！」

驚いた。以前読んだその手の雑誌には「好きな人のモノでも飲むのは気持ち悪い」とか「彼氏が喜ぶから、仕方なく飲んでる」なんて女の子の言葉が載っていたのに。

だけど姉貴はそうするのが当たり前のように、頬や口の周りに付いた精液を舐め取っている。顔のものを全部舐め終わると、今度は胸にかかった分も。

それが終わってからようやく、顔と手をティッシュで拭いた。

「すつごい量。ずいぶん溜まってたんだね。それとも、お姉ちゃんのフェラがそんなによかった？」

「……………」  
俺は恥ずかしくて、なにも答えられずにいた。すると姉貴は気分を害したように頬を膨らます。

「どおなの？　ちゃんと答えなさいよ！」

「……………すく、良かった。信じられないくらい……………自分でするのなんて問題になんなくて……………。姉貴って……………その、テクニシャン？」

「まあね、けっこう自信あるよ。さ、撮影の続きしようか」

姉貴は嬉しそうにえへへと笑いながら、ベッドに横になろうとした。だけど、すぐにがばつと起きあがって俺を睨む。

「……………って、ちよつと慎くん。あんた、ぜんぜん治まってないじゃない！」

そう。あれだけ大量に射精しながら、俺のモノはまだ隆々と上を向いていたんだ。

後編に続く

だから姉にはかなわない (後編)

「なによ。あれだけ出したのに、ぜんぜん大っき  
いまんまじゃないの!」

少しも静まる様子もなしに隆々と天井を向いて  
いる俺のモノを見て、姉貴は半分呆れたように  
言った。

そんなこと、俺に言われたって困る。これは俺  
の意志とは無関係に行動する生き物なんだから。

正確に言えば、姉貴のフェラチオでいったあと、  
少し静まる気配は見せた。

だけど、顔にかかった精液を舐め取る姉貴の仕  
草がすごくいやらしくて、それを見ていたらすぐ  
に勢いを取り戻した……っていうか、かえって先  
刻よりも元気になってしまったくらいだ。

だから、俺に文句を言われたって困る。半分は  
姉貴のせいだ、って言いたいけど、そんなことを  
言ったら怒られるのは目に見えているから黙って  
いた。

「……慎<sup>しん</sup>くんって、けっこう凄いんじゃない?  
精力絶倫だね」

ビクンビクンと痛いくらいに脈打っているペニ  
スを見つめて、姉貴が言った。

「そ、そうかな……?」

ゴクリ……姉貴が喉を鳴らして唾を飲み込ん  
だ。

少し間をおいて、姉貴にしては珍しく躊躇いが  
ちに口を開く。

「……お姉ちゃんに、入れてみる?」

「え? えっと、その……」

「正直に言ってごらん。お姉ちゃんと本番したく  
ない? お姉ちゃんの……中に、入れてみたくな  
い?」

姉貴は、指で自分の割れ目を広げて、挑発する  
ような目で俺を見た。

「そ……そりゃ、入れてみたい……けどさ……で  
も、姉弟で……そんな……」

俺だって健康で童貞の高校生、セックスしてみ  
たいに決まってる。だけどこれは、これだけは越  
えちゃいけない最後の線だと思う。

「いまさらなに言っただの。じゃあ、姉弟でエッ  
ちな写真撮ったり、フェラチオするのはいいわ

け？」

「いや、でも……そんな……」

「もう！ ぐずぐずしないでそこに横になりなさい！」

ベッドを指差して姉貴が怒鳴った。俺は慌ててそれに従う。小さい頃からの条件反射で、姉貴に強く言われると逆らえないんだ。

ベッドの上に行儀よく仰向けになると、姉貴の手がペニスを握った。

「もお、まだこんなに固いんだから……」

「……ごめん」

「この欲張りなおちんちんを、お姉ちゃんが満足させてあげる」

姉貴は愛おしそうに先端にキスすると、ちよつとだけそれを口に含んだ。

もうこれ以上はないってくらいに固く、大きくなってるんだからそんな必要はないって思ったんだけど、唾液で濡らして入れやすくするためだったらしい。

すぐに、ペニスを握ったまま俺の上にまたがって、あそこの入口に当てた。

唾液に濡れた亀頭、愛液に濡れた割れ目。二つの粘膜が触れ合う。

「慎くん……あんた、初めて？」

「……うん」

「初めてがお姉ちゃんでも、いい？」

「……うん、いいよ」

っていうか、この状況下で「やだ」なんて言うチエリーボーイはこの世に存在しない。

俺がうなずいた瞬間、姉貴がすとんと腰を落としました。

「ああっ！」

「はあああああつつつ！」

ふたり同時に、悲鳴に似た声を上げる。

俺の童貞は、一瞬で姉貴に奪われてしまった。

「ああ……んっ！ ん……あ……んふう……す

ご……すごい……突き上げてくるう……」

奥まで入っている。俺のペニスが、根元まで姉貴の中に飲み込まれている。

俺は今、姉貴とセックスしているんだ。

「は……あ……ああっ！ ねえ、お姉ちゃんの……中、気持ち……イイ？」

瞳を潤ませた姉貴が聞く。

小刻みに腰を動かしている。

中は熱くて、すぐく又ル又ルで、まるで絡みついてくるみたいだ。

俺のペニスは先っぽから根元まで、柔らかな粘膜に包みこまれて擦られている。

「イイ………すごく………いいよ！ も、もうっ！」

「ああ………！ んふ………う………ん！」  
いつてしまった。

情けない話だけど、姉貴がちょっと腰を動かしただけでいつてしまった。

だけど仕方ない。入れる前から、もう限界ギリギリだったんだから。

俺は、姉貴の中に発射してしまった。

ドクン、ドクン。

姉貴の中で脈打っている。

「ん………あん、あ………あん！」

姉貴が悶えるように身体をくねらせる。

その動きに合わせて、キュッキュとあそこが締めつけてくる。

十分に濡れていた膣内に俺の精液が加わって、

より一層又ル又ル感が増しているようだ。

そのせいだろうか。俺のペニスはまだ全然勢いを失わない。

「んふ………あ、ああ！ んん………あん！」

姉貴もそれはわかっているみたいで、休むことなく動き続けている。

その時になって俺は、大変なことに気が付いた。

「やばい！ 中出しちゃった！」

「大丈夫。今日は安全日」

俺の狼狽ぶりが可笑しかったのか、口元をほころばせて姉貴が言う。そして、上体を前に倒すと俺の唇にチュツとキスをした。

俺は、安堵の息を漏らす。

「そう………よかった………運が良かったな」

「偶然じゃないよ。なんで今日を選んだと思ってるの………ん、ああっ！」

姉貴がまた身体を起こす。自分の体重でペニスが奥に入って深い部分を突かれたのか、身体を仰け反らせて切なげな声を漏らした。

「え？ 母さんがいないからじゃないの？」

「………それもあるけど………んふ………、なにより、

今日が……あ、安全日だから……」

腰を振りながら、途切れ途切れに言う。

俺は驚いていた。わざわざ安全日を撮影に選んだ……ということは……。

「え……、それってつまり……姉貴は最初から、俺と……セックスしようと思ってた？」

ってことはつまり……つまり……姉貴は……俺のことを……。

「な〜に言ってるの、バカ！」

姉貴は一度動きを止めると、ベッドに手を着いて俺の顔を真上から見下ろした。

「美しいお姉さまの色香に迷ったあんたが、キレて襲ってくるかもしれないと思って、念のため安全日しておいたの。やっぱり正解だったわ」

……俺のこと、全然信用してなかったわけね。

でも、別に俺が襲ったわけじゃないぞ。そりゃあ……あのまま撮影を続けていて、最後まで理性を保てたかどうかはわからないけれど。

「それにしても……慎くんの、元気だね。続けて二回も出したのに、まだ元気いっぱい……すごい……固いの」

姉貴がまた腰を動かし始めた。

動きはどんどん速く、そして激しくなっていく。前後に大きく、擦り付けるように腰を振る。

姉貴が腰の前に突き出すときに、ペニスの下側が擦られるのがすごく気持ちいい。

腰の動きに合わせて、姉貴の胸が揺れている。前後の腰の動きは、徐々に縦長の楕円を描くような動きに変化していった。姉貴が腰をくねらすと、俺のペニス姉貴の中をかき混ぜることになる。

膣の粘膜が絡みついてくるみたいだ。

「あぁっ！ はぁっ！ あぁぁん！ あんっ、あんっ、あぁっ！ あんっ！ あぁっ！ あぁっ！ あぁっ！ あぁっ！」

よくもあんなに動けるって感心するくらい、激しくて速い動きだ。姉貴ってば、普段からサンバの練習でもしてるんじゃないのか？

姉貴の胸が弾むように揺れている。

髪を振り乱して感じている。

汗が、ぼたぼたと俺の胸や腹に落ちてくる。

「イイよっ、イイッ！ 慎くんのおちんちん気持ちイイッ！ あぁっ、あぁぁっ！ 感じちゃうっ！」



姉貴は夢中で俺の手を取ると、自分の胸に導いた。俺はされるがまま、揺れる乳房を掴んだ。

「そう！ おっぱい触って！ もっと、もっと強く！」

そう言われて、最初は遠慮がちだった手に力を込めていく。しまいにはちよつと乱暴すぎるかなってくらいにギュって掴んでしまったけど、姉貴は痛がる様子もなく、むしろ悦んでいるみたいだった。

「イイイっ！ イイのっ！ イイのおっっ！  
あああ、あああっっ！」

二人の結合部はもうヌルヌルというよりも、びちゃびちゃというか、ぐちゃぐちゃというか。腰を振るたびに飛沫が飛んでるんじゃないかってくらいに濡れている。

じゅぶ……ぬちゃ、くちゅ……といやらしい音が響く。

ペニス全体が、ヌルヌルの柔らかなおまんこに包み込まれて、擦られて。

気持ちいいなんてもんじゃない。気の遠くなるような快感だ。

「もう、もう……俺っ！ 姉貴いっ！」

限界だ。もう堪えられない。

「待って！ もうちよつと……もうちよつと……ああっ！ ああっ、お姉ちゃんも……お姉ちゃんもイクからああっっ！」

小柄な姉貴が、俺の上で跳ねるように腰を上下に動かしている。

一度腰を浮かして、また根本まで一気に沈み込ませて。

上体を仰け反らして、大きなストロークを繰り返す。

「イクうっ！ イクうっ！ イつちゃうっ！  
イイのおっ！ イイいっ！ ああああっっ、  
イクううっ！」

姉貴の叫びを聞きながら、俺は射精していた。

思いつきり、すべてを解放するように。姉貴の口でイってしまった時に負けなくらいたくさん。

ビクビクと脈打つペニスを、膣の粘膜が痙攣するように締めつけてくる。精液を搾り取るうとするかのよう。

姉貴は最後の叫びをあげながら、腰をくねらし  
ている。

「あああああつ……………つ、……………あ！」

肺の中の空気をすべて吐き出すと、力尽きたか  
のように俺の上に倒れてきた。

全身汗びっしょりで、小さく震えている。

俺は全身の力が抜けていくのを感じていたけ

ど、姉貴の身体に腕を回してぎゅっと抱きしめた。

フェラもしてもらったしセックスもしたのに、

まだ一度もこうして抱いていなかったことに気付  
いたから。

姉貴の身体は柔らかくて、思っていたよりも  
ずっと小さく感じた。

考えてみれば当然だ。身長百五十五センチの姉  
貴は、俺より二十センチくらい小柄なんだから。

俺が精神的に劣勢に立っているから、実際より  
も大きく感じるんだろう。でもこうして抱いてい  
れば、姉貴は実物大の、胸以外は小柄な女の子だっ  
た。

二人とも放心したように、しばらく無言のまま  
肩で息をしていた。その間、俺たちはずつつな

がったままだった。それでもさすがに今度は、俺  
のモノは先刻までの勢いを失っていた。

「……………どうだった。初体験は？」

俺に抱きついたまま、姉貴が聞く。

「お姉ちゃんとのセックス、気持ちよかった？」

「……………うん。すっごい、よかった。もう最高。俺  
三回も続けてこんなに出したのなんて初めてだ  
よ」

「んふ……………」

姉貴は小さく笑うと、俺の首に腕を回した。そ  
して、唇を重ねてくる。姉貴とのキスは二度目だ  
けど、先刻はゆっくりと感触を確かめる余裕もな  
かった。

「姉貴は……………その……………どうだった？俺と……………し  
て……………」

俺の声はちょっと自信なさげだった。俺にとっ  
ては初めての女性経験だから、気持ちよかったの  
は当然だ。だけど経験豊富な姉貴は、俺なんかじゃ  
物足りなかったかも。一応、感じていたとは思っ  
ただけだ。

「……………すっごい、感じた。お姉ちゃん、自分がリー

ドするえっちって向いてるみたい。それに慎くんのつて、すごく立派だもん。自信持っていいよ」  
よかった。安心した。俺は姉貴の身体に回した腕に力を込めて、もう一度唇を重ねる。

抱き合ったまま、そのまま何分間かじっとして  
いた。

全身が、なんともいえない倦怠感に包まれている。だけど精神的にはすごく満たされているみたいで。

「一晩中、ずっとこうしていたいと思った。

だけど……」。

「……あ、慎くんってば、ばか」

なんの前置きもなしにいきなり、姉貴が耳元でささやいた。

「は？」

なんのことだろう。俺、何か失敗しただろうか。

そりゃあ、一瞬先にイってしまったけど、姉貴もちゃんとイったみたいだったし。

「せっかくのチャンスに、あんた写真撮ってなかったっしょ！」

「あっ！」

すっかり忘れてた。それどころじゃなかった。初体験で、あんなに気持ちよくて、写真のことなんて頭になかった。

それでも、インターバルタイマーをセットしたカメラがあつたことが唯一の救いだ。

「ああ、もう。せっかく、あんなに乱れたのに……」

「……ごめん」

「いいわ。まだ夜は長いんだし」

「え？」

「ちよつと休めば、まだまだできそうじゃない？」

今度はちゃんと撮りなさいよ。ほら、こんなポーズなんてどう？」

姉貴が俺の上から降りた。今まで入っていたものが、ヌルリと抜ける。

ベッドの上に腰を下ろして、姉貴は両脚を開いた。

「ほら、ちゃんとカメラ持って」

そう言っつて、指であそこをいっぱいに広げて見せた。

真っ赤に充血した割れ目から、白い液体が溢れ出している。

「慎くんってば、お姉ちゃんの中にこんなにいっぱい出しちゃって」

お尻の方へと垂れる精液を、指で拭ってペロペロと舐める。

俺は慌ててカメラを拾い上げると、続けてシャッターを押した。

拭っても拭っても、精液は奥の方から溢れ出し続ける。

「お姉ちゃんのおまんこ、慎くんのザーメンでいっぱいだよ」

人差し指と中指を中に入れて、掻き出してくる。精液がべつとりとまとわりついた指を、わざといやらしく、俺に見せつけるように舐めた。白く汚れた指の一本一本に、舌を絡ませる。

「ほおら、もう元気になった」

姉貴が嬉しそうに笑う。

俺のモノは、もう固く反り返っていた。姉貴の挑発的な仕草は効果てきめんだ。

「はい、横になって。ちゃんとカメラは持ったままね」

俺は素直にその言葉に従う。姉貴が俺の上さま

たがった。

ペニスを握って、今度はゆっくりと腰を下ろしていく。

ずぶ、ずぶ……と、姉貴の中へと埋まってゆく。

「はああああ………入ってくるう………太いのが………奥まで………」

俺はモータードライブを使って、一番奥に突き当たるまでの姉貴の表情の変化を、残らずフィルムに収めることに成功した。

## エピソード

結局あの夜は、明け方まで寝かせてもらえなかった。

数え切れないくらい、姉貴の中に出した。

気持ちよくて気持ちよくて、何度でもできそうだった。なんだか、最後の一滴まで搾り取られたような気がする。

あの一晩で、セックスの気持ちよさを全て教え込まれたみたいだ。

フィルムは二十本以上使った。できあがった写真はこの前のなんか問題にならないくらいハードなもので、当然、儲けもそれだけ多かった。

あれから一週間が過ぎた日のこと。

俺がほくほく顔で札束を数えていると、どこからともなく姉貴が現れた。金の気配にはやたらと敏感なんだから。

「じゃ、約束通り七割ね」

俺の手から、札束を奪おうとする。

「ちよつと待った！ 今回は機材借りるのにも金がかかっているんだから、七割なんて暴利だよ！」

「なによ。恥ずかしい写真を撮らせてあげた上、あんな気持ちイイこととしてあげたんだから当然でしょ」

「なに言ってるんだよ！ 姉貴の方が楽しんでたじゃないか！ 山分けだよ！」

「え〜！ 今晚また気持ちイイこととしてあげるから、ね？」

「とか言ってる、また自分が楽しむ気だろ！」

「慎くん、したくないの？」

「……っ、そりゃ………したいさ」

一瞬返事に詰まったけれど、素直にうなずいた。

あの夜、姉弟としての一線を越えてしまった俺たちだけど、この一週間、エッチなことは何もしていない。

姉貴は何も言わないし、俺の方から誘うなんてできるはずがない。

一度セックスしたからといって、これからもさせてもらえるなんて考えちゃいけない。姉貴は本

当に気まぐれな奴なんだから。下手すると「エツチしよう」なんて言った瞬間に張り倒されるかもしれない。

だけど、一度あの快感を知ってしまった以上、またしたいと思うのが当然のこと。一週間も経てば当然下半身が疼いてくる。

だから正直なところ、姉貴の方から誘ってくれないかな、なんて淡い期待を抱いていたところだった。

「……でも、姉貴だつてしたいんだろ？」

「……したい」

「じゃあ、山分けでいいじゃん」

「……六割五分」

金を巡る攻防はその後もしばらく続いたけれど、結局最後は姉貴が折れて、なんとか五分五分にしてもらった。

だけど交換条件として、今夜は姉貴を最低五回以上イカせなければならぬことになった。姉貴をそれだけイカせるまでに、いったい俺は何回イってしまうのかと考えると気が遠くなる。

「姉貴なんか、自分の金を遣うことないだろ。服

だつて靴だつて、彼氏とかパパとかに買ってもらえばいいじゃん。いるんだろ、どうせ」

「そりゃ、靴とか服とかバッグとかアクセサリーとかはね」

「他に何かあるんだよ」

「そうね……」

唇に指を当てて考えていた姉貴が、いきなり抱きついてきた。

「バイクを買つて、夏休みはあんたと一緒にツーリングなんて、どお？」

背伸びをして俺の首に腕を回し、耳朵を噛むような体勢でささやいた。

「……え？」

一瞬、俺の顔が緩んでしまったけれど、すぐに思い直した。

姉貴のことだからきつと、二人でどこか人気のない処に行つて、野外露出とかアオカンとかに挑戦しようとしてるんだ。

「……慎くんは、お姉ちゃんと一緒に出かけるのはイヤ？」

俺は首を横に振った。

姉貴と二人でツーリング。それも楽しいかもしれない。

まあ、色々と苦労させられそうな気はするけれど。

だけど、最近気付いたことがある。

俺は、こんな姉貴に振り回されるのが決して嫌ではないんだ、って。

だから、いつまで経っても姉貴には勝てないんだと思う。

## 閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

### モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

### 印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。